



文学者——余の天賦

文学者とは筆にて真理と美観と人情とを流す者なり。故に彼は以て百代の師たる可く、以て茅屋の民の友たる可し。是は免れぬ此不可思議なる世界に在りては感ずる処、見ざる処、知る処、考究せしむるの外、如何にもすゝき種存し、彼は如此にレハ暗黒なる時肉の大海を突進しつゝ、行く人数の急先鋒たるのみ、人類は此尊貴の処、感ずる

及、考究せしむるの執着を要取りつゝ、直方行くまでなり。昔は預言者ありて神より直接に命の苦言を聞きたり。今は文学者ありて預言者あり詩人たり又僧侶あり儒者あり。十九世紀以後の世帯は坐して宗教を聞き得るの時代なり。一錢文字にてコレコレを語り、口より出せし語を語り。一技の筆にて一万人を集めたる會堂を無形に造る得し。

八枚

余は是れ文学者たる可き運命なるか如し。余は此類の日本に生れたり。とれは余は此日本に極愛する所あり、此日本人を極愛する所あり、余は日本人を



リ。筆は何青も遠く。たゞ名は横者たゞいふはする人
み、陰遊家たゞたききのみ。まはれんは伊と一筆のまきん
能あるが故に、心ははの好し此歌をこらんはする也。余

か何首、さきりし今の日本の文を著せし一宿の
熟考の念を起さざらば可し。自家の筆を良方お
みやくし、**藝障**もあらずし、**新体詩**も作らざりし、
十返もまぐし、**厚史**もまぐし、**ドラム**もまぐし、
厚薄も送くし、**竹地**もまぐし、**後教**もまぐし、
決して此等、**極端**せよし。

世間の批評には一切無地着はるし。
生活は困ることまき標、**け**し。**立**障を避け

、**出来**たけ支をまき、**厚く**立はるし。
信伯に於ける一年の生涯、
死、

47

三百年の後、**信伯**の遺書、
引信、

右の如き題目は悉く余が一生の心血を注ぐに足ら
ぬの事なり。希くは**大膽**に此天地に立し見、**如**、**感**
ずる也、**知**、**如**を公言し、**表**し、**出**し、**行**んことを。

律女加筆

律女余を指しきりたるか故に余は死んぬ此世界に
終焉なりおれをきりたり。されば希くは余が信けり

右の如き題目は悉く余が一主の血を注ぐに足ら
ぬの事なり。希くは方瞳に此天地に立て見ゆ如く、感
ずる処、知る如く、公言し奉表し詠出し傳ふことと。

律女加等事

律女余を指しきりたるか故に余は死んじ此世界に
登降す可おん事なり。されば希くは吾が傳けの
心を黙するにせめては此天啓を尤も忠実に力めん
ことと、尤も華しく勉めんことと。

若し余が文尋の功徳に由りて人情に里疾し直理と
に多女の寄与を為し解は幸なり。

神若し許し玉はし余を一地方の一付通師たること

を御おぼりたる ^{たして} 余は基督を ^を 神う修めきうと心する宜

付し傳はぬこと者

を擲し従ふせん。素

此れより以上の並記をなれぬあり。故に余は基督を

神の五愛ににんじ定む神の恵みの表現、十字架を罪の

贖するにたし確信をなすは、余は五た等を擲し脚洋

と尊厳とを用ふ事とせん。余若し此の如し人おめ何ん

寺宿下。要するん之を、利身、懐疑者の全れ傳ふの

み。其うカラい山とさう、其地年をり、まじと断てま。

國木田獨步稿文集書



本間文庫
文庫 14
A22

獨

国木田独歩原稿

文学者（余の天職）